

ほっとらいん
ふるむ
ほんごう

初の「訪問看護フェスティバル」 東京都で開催される

1月11日(土)、東京都庁(新宿区)にて、「訪問看護フェスティバル」——在宅療養を支える訪問看護 聞いてみよう! 使ってみよう! なってみよう!——が開催された。東京都および東京都看護協会の主催による初の試みであり、東京都訪問看護人材確保事業の一環。

「大介護時代」に向けて

一般市民と訪問看護に関心をもつ看護師を対象とし、会場の一角には介護相談や就業相談



のブースも設置。降雪も予報された寒空のもと300名超が訪れ、高まる訪問看護への関心を裏付けた。

企画には、共催の東京訪問看護ステーション協議会が全面協力。開会の挨拶において、嶋森好子都看護協会長は、こうした都として初めてのイベントの意義を強調。また、東京都福祉保健局高齢社会対策部長の中山政昭氏は、近年、都内のステーションは微増傾向にあるものの(698か所、2013年10月現在)、今後ますます増大するニーズに対応するには、訪問看護師の質・量ともの向上が求められると期待を寄せた。

基調講演では、樋口恵子氏(NPO法人高齢社会をよくする女性の会理事長)が、医療と社会の発展による「長寿」という恩恵に伴い、多くが介護を必要とするようになった21世紀を「大介護時代」と位置づけた。独居高齢者の約2分の1が自宅で亡くなっているスウェーデンの地域看護師は、日本の訪問看護師数の約10倍にも達するという。

終末期を三途の川が広くなり、時に荒波も立つようになった」と喻えた同氏は、この川を「自分らしく」渡りきるには、とくに疼痛緩和の技術をもった訪問看護師が増えてほしいと期待を寄せた。また、今後は、QOLだけでなく、QOS(クオリティ・オブ・ソサエティ、社会の質)が問われるとも示唆した。

訪問看護の魅力を語り合う

シンポジウム「あなたらしさを支える訪問看護(写真)では、本田徹氏(浅草病院、訪問診療医)、長江麻友子氏(訪問看護ステーションけやき)、高橋操氏(訪問看護ステーションみけ)、阿部智子氏(訪問看護ステーションけせら所長)が登場。新卒訪問看護師としてまもなく満3年を迎える長江氏(本誌2013年8月号 P.61)は、訪問こそ1人ですが、本質的には「チームケア」であると強調。利用者1人ひとりに向き合い、自らサービス内容をデザインできるなどのやりがいを語り、新卒訪問看護師の可能性をアピールした。

また高橋氏は、出産を機に5年間はいわゆる潜在看護師であったが、訪問看護師として復職し、介護支援専門員や訪問看護認定看護師の資格を取得するなど、着実にステップアップしてきた。ライフスタイルに合わせた自由な働き方ができることや、他職種を含めたチームで、利用者・家族の人生、そして地域全体をも支えていけることなど、訪問看護の魅力を語った。

座長の椎名美恵子氏(東京訪問看護ステーション協議会副会長)は、訪問看護は、利用者1人ひとりの「その人らしさ」を支えると同時に、訪問看護師1人ひとりの「自分らしさ」をも支える働き方であると示唆した。

また、シンポジウムの前後2回にわたって行なわれたミニ講座では、「訪問看護の歴史」家崎芳恵氏(野村訪問看護ステーション所長)、「訪問看護師の関わりで変わる認知症の方と家族の暮らし」宮田乃有氏(田園調布医師会立訪問看護ステーション統括所長)、「どんな医療処置が必要でも自宅での生活を応援する方法」広川直美氏(ナースステーション東京目黒支店所長)、「最期まで自宅で過ごしたいという思いを支えてみませんか」渡邊美也子氏(訪問看護パリアン所長)が講演し、訪問看護のさまざまな可能性が示された。